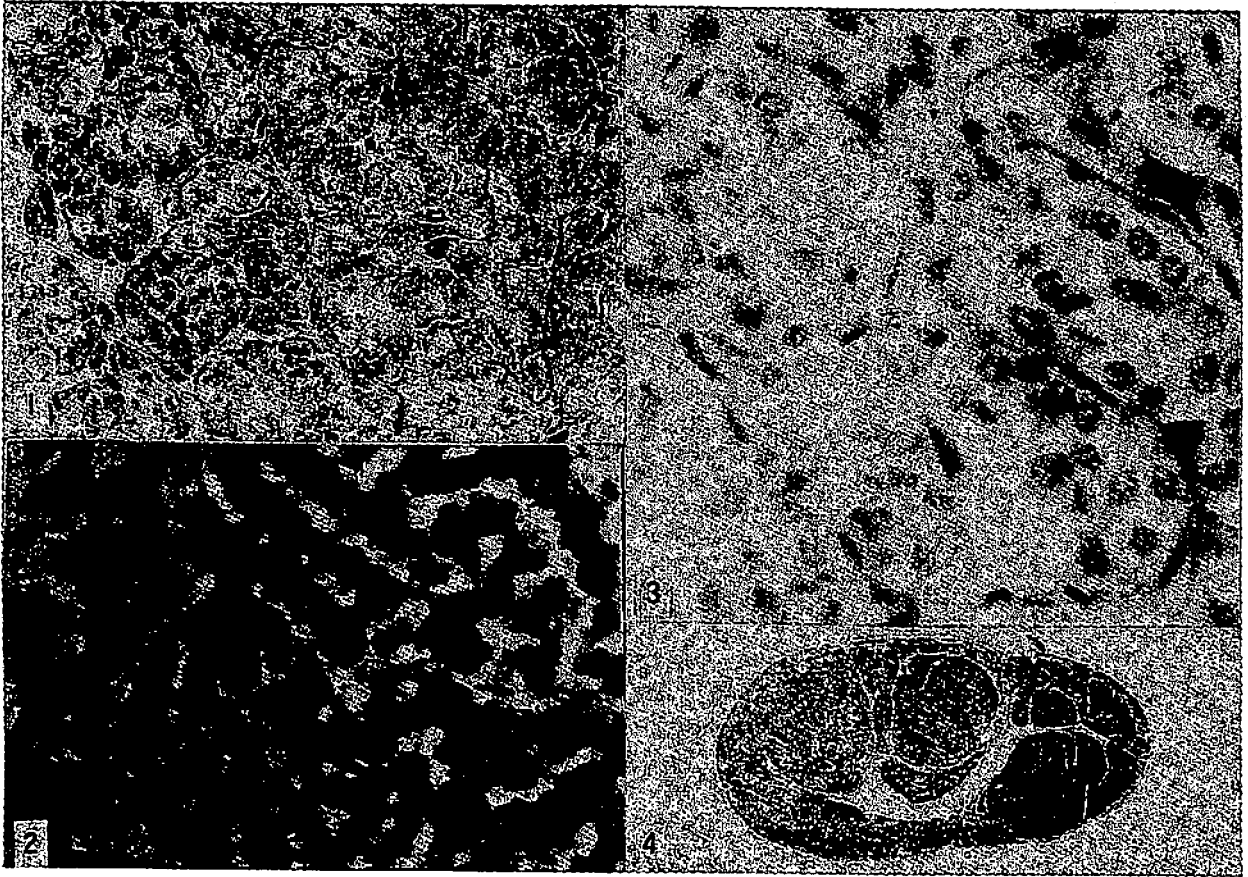


犬の肝臓の糖原蓄積(新生)と併発した副腎病変

東京農工大学農学部家畜病理学教室出題 第15回獣医病理学研修会標本 No.228



動物：成犬，セパード，牝。

標本：肝臓と副腎腫瘍。固定：ホルマリン液固定，更に Bouin 液後固定。染色：A. Trichrome 染色，B. PAS 反応。

材料の由来：東京都国分寺市開業内田獣医師等が，犬糸状虫症の外科的療法研究のため，畜主より譲り受けて実験中，急に斃死したものである。

剖検所見：皮毛粗剛で強く削瘦し，皮下腹腔の脂肪組織は殆ど認められない。左胸壁・心嚢・心臓肺動脈起始に手術創があるが，犬糸状虫(約30匹)の摘出は未だ行われていない。左右の肺臓には陳旧な栓塞性病変が散発している。肝臓は，肝固有色及び血色を失って灰白色調が強く，表面は細顆粒状，萎縮性で硬度を増し，一見，ホルマリン固定をしたものようである。右の副腎は腫瘍化して扁平に高度に腫大(5.5×4×2 cm)し，右腎門部に圧痕を形成して，輸尿管と後大静脈を軽く圧排している。更に腫瘍組織は，右腎静脈内に連続して進展増殖して，後大静脈内に突出している。左の副腎には，皮質の結節性肥大性病変が顕著である。他の臓器は，貧血し萎縮性であるが著変はなく，転移病変も認められない。

組織学的所見：本例は固定されるまでの経過時間(死後数時間の材料をフリーザーに10日間冷凍，更に約半日間流水で軟化を行う)が長く，又，2日間ホルマリン液に投入されていたにもかかわらず，PAS陽性，唾液消

化後陰性の糖原が多量に認められ(図2，PAS，中拡大)，肝の肉眼所見がよく裏付けられた。健常のそのように小葉中心部に多く，周辺部には少ない(図1，PAS，弱拡大)が，間質の血管・リンパ管内にまで瀰漫性に存在するところよりみて，死後変化による移動も考えられる。小葉間結合組織の増生は，糸状虫性のものとしてよいであろう。

この肝病変を考察する臓器としては両側副腎のみが残され，下垂体や膵臓等を含めた他臓器は投棄されてしまった。腫瘍組織は，正常副腎皮質の3層のそれぞれに類似した構成を示す(図3，PAS，強拡大)が，脂肪性物質は少ない。その血管侵入度よりみて皮質癌とすべきであろう。一方に発した皮質腫瘍にホルモン活性がある時は，他側の皮質は萎縮するものが多いとされている。本例では反対に左副腎皮質の肥大性病変(図4，Sudan black B，ルーペ拡大)が顕著であり，これのみでも糖質ホルモンの過剰症をうかがえる所見であった。結局のところ，左右の副腎髓質の萎縮或は消失と左皮質の過形成が，肝糖原蓄積(新生)の原因の一部となっていたのであろうと想像するにとどまった。

討論：正常肝組織の糖原含量と，本例との差異についての疑問が述べられ，又，皮質癌の診断は一考を要するとの意見があった。